

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「僕」は北海道の小さな町の楽器店に勤めるピアノ調律師である。まだ見習いで、自分の技術に自信が持てない「僕」は、あるとき先輩の柳さんに同行してピアノ調律師の現場を見学させてもらった。その家には、和音と由仁というふたりの姉妹がいた。「僕」はその時、姉の和音が奏でるピアノの音色に魅了されてしまう。ところが、柳さんが帰った後で、調律師の調整を頼まれた「僕」はそれに失敗してしまった。

ときどき、ふたが店に来るようになった。ふたり揃ってだったり、どちらかひとりだったり、たいていは学校帰らしい時間に現れて、書籍コーナーで楽譜を見たり、ピアノ関連の本を見たりしている。店はちょうど学校と家との間にあるから、寄りやすいのだと思う。

ふたこの家のピアノの調律師に失敗して以来、どうやら親しみを感じてくれているらしい。特別な用事があるわけでもなさそうで、たまたま顔を合わせると、ピアノの話や他愛もない学校の話をして、にこにこ帰っていく。

「お仕事中、おじゃましました。」

「へこんと頭を下げるようすがかわいらしいと北川さんが言う。」

「役得ねえ、女子高校生の家の調律師って。」

あの家の調律師は、ほんとうは柳さんだ。僕は柳さんについていただけだ。しかも失敗している。

今日はずらしく受付から呼ばれた。下りてみると、ふたごだった。正確にはふたこのうちのひとりだ。見ただけでは区別がつかない。僕に気づいて、まじめな顔でお辞儀をした。

「こんにちは。お仕事中にすみません。」

「いいえ。」

和音だ、とわかる。こんな生まじめな顔をするのは和音だ。和音はいきなり、ごめんなさいと頭を下げた。

「いつも勝手に押しかけて、ほんとにごめんなさい。」

「いえ、ぜんぜん、だいじょうぶです。どうかしましたか。」

聞くと、さらに唇をきゅつと結んだ。

「戸村さんなら話を聞いてくれるかなって。すみません。」

もう一度謝ってから、和音は話し出した。

「もうすぐ発表会があるんです。」

「そうですか。」

「由仁は、言ってませんでしたか。」

何日か前に由仁がここへ来たけれど、その話はしていなかった。僕が首を横に振ったのを見て、和音は視線を落とした。

「昔からそうだったんです。由仁は気持ちが大きくて、発表会のことなんて特に気にもしていない。たぶん、楽しめればいい、くらいに思っていて、自由奔放に弾くのに、ほんとうに楽しいピアノが弾けるんです。練習だって、しない日はしない。私はとてもそんなことはできないからつい練習しちゃう。」

「すごいね。」

「由仁はすごいんです。」

とうなずくので、

「和音さんがすごいと思う。」

正直な感想を言ったら、

「すごいくないです。」

即座に否定された。

練習って、つい、するものだろうか。僕はピアノを弾かないからほんとうのところはわからないけれど、つい、練習してしまうのだとしたら、それはすごいことなんじゃないか。

解答は全て解答用紙に記入しなさい。
字数制限のある問いは、句読点も一字に数えます。

「練習するのが好きだけです。弾けなかった曲が弾けるようになるとうれしいんです。家で弾いたら、家族も、ピアノの先生も、私をほめてくれます。」
淡々と、和音は話した。謙遜している感じでもなかった。ほめてくれますが、それがどうだと言うのでしょうか。たぶん、和音はそう思っている。そしてそれはきつと正しいのだろう。ほめてもらうためにピアノを弾くのではない。

でも、本番になると、由仁なんです。由仁のほうがいい演奏をしてしまう。練習では私のほうがよかったはずなのに、たとえば、発表会だとか、小さなコンクールに出たときも、たくさん拍手をもらえるのは由仁のほうがなんです。「それは本番で、和音さんがミスするということが。」

「いいえ。」

和音は毅然と胸を張った。

「由仁の出来がひとまわり上を行くんです。あの子には華がある。ここぞというときに力を発揮して、聴く人の心をとらえる演奏ができるんです。」

「それなら、いいんだよね。和音さんが本番で力を発揮できなくて二番手だった由仁さんが繰り上げ当選する、ってことじゃないんでしょう。和音さんはちゃんと和音さんのピアノが弾けている。それなら、かまわないんじゃない？」

和音は目を見開いて僕を見ていたが、やがてはちと瞬きをした。

「ほんとだ。」

それからゆつくりと唇の両端をあげて微笑んだ。

「私が本番でだめになるわけじゃない。だから私が気にすることじゃないんですね。」

ほんとうは、僕は弟を恨んだ。ここの一番のときにいいところをさらってってしまう弟がうらやましかった。でも、気づかないふりをした。運があるとかないとか、持って生まれたものとか、考えても仕方のないことを考えはじめたら、ほんとうに見なきやいけないことを見失ってしまいたいそうだった。

「どうもありがとうございます。」

おじやましてしまっただけでほんとうにすみませんでした、と二度ばかり頭を下げて和音は帰っていった。僕はただ和音が由仁をうらやましがったりしないといいなと願うばかりだ。

(宮下奈都『羊と鋼の森』より)

※ 毅然と…意志が強く、ものに動じない様子

問一 部A～Cの言葉の意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- A 他愛もない
 - ア なげやりな
 - イ はりあいがない
 - ウ 思慮分別に欠ける
 - エ あまり重要でない

- B 役得
 - ア その仕事が自分に向いていること
 - イ その仕事によって役割を得ること
 - ウ その役割のおかげで得をすること
 - エ その役割のため損得が生じること

- C 自由奔放に
 - ア でたらめに
 - イ 自分勝手に
 - ウ 気ままに
 - エ 大胆不敵に

問二——部1に表れている和音の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 和音は「僕」に好意を持っているため、悩みを打ち明けるのが恥ずかしくて緊張している。

イ 和音の個人的な悩みを聞かされても、「僕」は迷惑なのではないかと思ひ、緊張している。

ウ 和音が悩みを打ち明けても、「僕」がとりあつてくれないのではないかとと思ひ、緊張している。

エ 「僕」に悩みを打ち明けるところを、由仁には絶対に見られたくないとと思ひ、緊張している。

問三——部2で、和音が「視線を落とした」のはなぜですか。その理由を説明した次の文の□に入る適当な言葉を十五字程度で答えなさい。

由仁が発表会について気にしていないことを知って、□というこ
が改めて分かり、気持ち沈んだから。

問四——部3には、和音のどのような気持ちが表れていますか。答えなさい。

問五——部4から5にかけての部分から読み取れる、和音の気持ちの変化を説明した次の文の□ I・IIに入る適当な言葉をそれぞれ答えなさい。
ただし、Iは二字で、IIは五十字程度で答えること。

「僕」の言葉は和音にとって I だったが、□ II
という意味であることが次第に分かり、心が軽くなった。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

焼きや串打ちどころか、割くことさえままならぬくせに鰻屋を自称している。二十年間にわたり鰻一筋に研究を続け、その生物学的な謎にすっかり魅せられてしまったからだ。すなわち、蒲焼きの鰻ならぬ生物学のウナギ屋である。

近頃、そんなウナギ屋は息苦しさを感じている。理由の一つは、震災とそれに続く原発事故、先の見えない世の有りに、多くの人が感じている憂憤と同じ類のものだろう。これに拍車をかけるのが、最近の鰻資源の危機的な減少である。うだるような夏の午後、油蟬の声を聞きながら食すは、やっぱり蒲焼きのはずである。そんな夏の風物詩が「今」消えようとしている。

一般に川の魚と考えられがちなウナギだが、実は、グアム島近くの海で産卵する回遊魚である。外洋でふ化した仔魚は、レプトセファルスと呼ばれる柳の葉のような浮遊幼生となり、およそ半年の間、海流に流されながら成育場である東アジアの沿岸域へやってくる。五センチほどに育ったレプトセファルスは、そこで親と同じ形の透明なシラスウナギへ姿を変え、河川へ来遊するのだ。私たちが食べている養殖鰻はすべて、この時に河口域で採集され、養殖池で育てられたものである。人工的に卵を産ませて育てる「人工種苗生産技術」は、まだ実用段階には至っていない。つまり、養殖鰻は人の手で育てられたとはいえ、生まれはるかマリアナの海、数千キロの旅を経て日本にたどり着いたれつきとした「天然生まれ」なのである。

今、このシラスウナギがほとんど採れなくなっている。「なぜ激減した」「どうしたら増える」「とにかくなんとかしろ」

ウナギ屋の元にも様々な声が寄せられる。率直に申し上げるならば、そんなことわしや知らないのである。

ほんの数年前まで、詳細なウナギの産卵場所は謎のままだった。当然、産み出された卵を見た人もない。東京大学の塚本勝巳教授をリーダーとする我々のグループが、その謎を解き明かしたのは、ようやく二〇〇九年になってからである。産卵場所はわかったものの、太平洋を回遊中の親ウナギが採集された例はない。つまり、彼らがどこをどう泳いで、二千キロかなたの産卵場へたどり着いているのかは、今もつてよく分からないのである。

緑に包まれた里山の麓、小さな流れに洗われる岩の下から、ちよこんと顔を覗かせた泥臭いウナギが、やがては真つ青な熱帯の海を、マグロやイルカやウミガメに混ざって数千キロも泳いでゆく。世界中で誰も見たことのない光景の最初の目撃者になりたい。これこそが自然科学の醍醐味だろう。

こんな脳天気な研究者に、生物としてのウナギならいざ知らず、食資源である鰻の管理・保護について聞かれてもどうしようもない。単にウナギを守るためだけならば、「捕ってはいかん！ 食ってはいかん！」と叫ぶだけだ。しかしかつては年間十五万トン以上も消費され、漁業から養鰻、卸販売から蒲焼きに至る確たる産業基盤を持つ鰻である。さらには、関東の背開き、関西の腹開き。串打ち三年割き八年、焼きは一生。土用の丑の日などなど。鰻が我が国独自の重要な食文化であることに異論はあるまい。緊急かつ強力に守らねばならない。その一方で、産業や文化の継承のためにはきっちり利用しなくてはいけない。こちらを立てればあちらが立たず、両方立てると私が立てないのである。

ウナギの減少要因には三つの可能性が挙げられている。すなわち、シラスウナギの乱獲、河川環境の悪化、そして地球規模での環境変動である。一九七〇年代には、我が国だけで百五十万トン以上も漁獲されていたシラスウナギが、今では東アジア四カ国を合わせても二十万トンにも満たない状況である。また、一生に一度しか産卵しないウナギは、川や湖で五年から十五年ほど成長しながら、その時が来るのを待つ。しかし、今、ウナギが生涯のほとんどを過ごす場所がえらいことになっているのは周知の事実である。加えて、近年の気候変動の影響か、地球上の海流がおかしな挙動を示したり、ウナギの産卵場所となる太平洋中央部の巨大な潮目が南へ動いたりするのである。要するにメチャクチャである。ウナギが減るのは当然で、増える要素はどこにもない。

そんな中、ウナギ屋がすべき事について考える。三つの要因のうち、地球レベルの環境変動については、もはや直接的な手の打ちようがない。せいぜい地球市民の一員として、環境に優しい生活を心がけるくらいだろう。

河川環境についても、利水や防災名目で設けられたダムや護岸を、「ウナギー！」などと叫びながら、いきなり蹴り壊していいはずがない。ここにも、こちらを立てればがまかり通る。

まず我々にできることは、一刻も早い人工種苗生産技術の確立を祈ること。それまでの間、天然のウナギ資源にできる限り負荷をかけないように利用することだろう。河川に生息しているウナギを食べないこと、捕らないこと。なぜなら、彼らはすでに長い時間をかけて、はるか産卵場へ向かう準備を整え始めている母親、父親予備軍なのだから。さらに、養殖用のシラスウナギの採取量を減らすこと。人に捕まることなく河川に遡上した彼らは、五年から十年後には次の世代へ命を繋ぐべく海へ戻って行くのだから。

どう考えても、このあたりが早急に実行可能かつ効果的なウナギ資源の保護方策のように思える。結局、ウナギ屋は己の無力さを嘆きしめながら、こう叫ぶしかないようだ。

「捕ってはいかん！ でも、食わなきゃいかん！ ウナギの生態や文化をしっかりと理解し、しみじみと味わいながら、心からの感謝と共に飲み込まなければいかん！」

問一 —— 部A・Bの本文中での意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- A 拍車をかける
- ア 事態をより好転させている
 - イ 事態をより落ち着かせている
 - ウ 事態をより深刻にしている
 - エ 事態をよりあいまいにしている

- B 醍醐味
- ア 何ものにもかえられない楽しさ
 - イ 謎を解き明かして得られた評価
 - ウ 真実をつきとめようとする熱意
 - エ 成果を上げて認められた満足感

問二 —— 部1「ウナギ屋」は本文中でどのような意味で用いられていますか。二十字以内で答えなさい。

問三 —— 部2のように筆者が言っているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ウナギの生態すらまだよくわかっていないのに、鰻資源の保護対策などのより高度なことを聞かれても答えられるはずがないから。
- イ ウナギの生態を研究するのが本来の仕事なので、鰻資源の保護対策などの専門外のことまで研究する必要など感じられないから。

ウ 謎に満ちたウナギの生態を解明することに集中していたので、鰻資源の保護対策を考えることはできる限り後回しにしたいから。

エ ウナギの生態すらまだ解明できないことを恥ずかしく思い、鰻資源の保護対策などの難解なことに知らないふりをしていきたいから。

問四 —— 部3について、どのようなことを「解き明かした」のですか。その答えとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ウナギが川魚ではなく、太平洋の海を回遊する魚であるということ。
- イ ウナギが東アジア沿岸ではなく、グアム島近くの海で産卵すること。
- ウ ウナギの卵がふ化してから海流に乗って、東アジアの海に来ること。
- エ ウナギが海流の変化によって、東アジアで急激に数を減らしたこと。

問五 —— 部4には「こちらを立てれば」の後ろに「あちらが立たず」が省略されています。「こちらを立てればあちらが立たず」とは、ここではどういうことを表していますか。それを説明した次の文の□ I・IIに入る適当な言葉を、十字以内でそれぞれ答えなさい。

河川のダムや護岸は、□ I ためには今すぐにも壊さないといけないものであるが、□ II ためには必要なもので壊すことなどできない、ということ。

問六 —— 部5・6は、それぞれ何のためにそうしなければならないと筆者は考えていますか。答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

医者はレントゲンをとって、血液検査をした。猫のくせにレントゲン？血液検査？ 医者は大きなレントゲン写真二枚をビューアーにはさんで真面目な少し沈痛な面持ちをしていた。

「ガンですね。は？ は？ は？」

「ここ、すい臓、こんなに大きく変形しています」。テニスボール程の丸い部分をさして医者は云った。

「それから、この肺のここ、ここ、転移していますが、[※]原発はどこかわかりません。もし調べるなら、腸や胃の検査してもいいですが、どうしますか？」「それって原発がどこか調べるだけなんですか」「そうです」「治りますか」「これだけ広がっていますから、手術してガンの所を取ってもねエ、内臓全部やられていきますよねエ」「手術しないでいいです」

1 えーッ、ガン！ 猫なのに。「どれ位、もちますか」「うーん、何とも云えませんが、一週間かもう少しもつか」。えっ、一週間？ えっ。「体重三キロへつてますねエ、脱水状態ですネエ、水飲んでなかったと思いますよ。点滴して抗ガン剤入れてみますか。何にもしないで、[※]安楽死という選択もあります」。安楽死という言葉は医者は云いにくそうに小さな声で、私の目を見ないで云った。点滴をしてもらうことにして一泊入院することにした。

次の日、猫はえさをべろべろ沢山食べたそう。ステロイドの注射もしたと医者が云った。ステロイドって、運動選手がドーピングに使うんだっけ？ つか九十二歳のおじいさんが骨折して入院して、もう寝たきりになってしまいかと思われた時、ステロイドを注射したら突然おき上って、病院の廊下をスタスタ二周もした事をきいた。注射が切れたらまたストンと寝てしまった。

医者が白い小さな丸薬をくれた。「抗ガン剤です」。口をこじあけてのどの中に放り込む様に教えてくれた。

「もし薬がきいたら、進行を遅らせることが出来ますが」と医者が云う。進行を遅らせるって事は、少し寿命が延びるって事なのか。

フネは金物のおりの中でうずくまっていた。刑務所に似ている。私がフネなら刑務所の中で死にたくない。

「もしすぐ苦しんだら、家で安楽死させてくれますか」

「その時は連れて来て下さい」。私は黙りこんだ。

私はフネを見たままずっと黙っていた。

「なるべくなら病院で」。医者は沈黙に耐えられないらしくかった。沈黙に耐えられない人は良い人だなあと思う。私はそれをぐいっとつかんだ。

「もしもの時、電話してもいいですよネ、来てくれますよネ」

フネを連れて帰った。

フネをフネの箱の中に置いた。冬中足温器を入れた箱の中に毛布をしいてあった。

フネはじつと目をつぶって置いたままの姿勢だった。箱のそばに水を置いてスーパールに行った。ステロイドはやつぱり一瞬のドーピングだったのだ。

4 一番高いかんづめを十個買った。コマーシャルで、シャンペングラスの中に入っていてチンとグラスをたたく奴だ。私はコマーシャルを見るたびに、ヘン、猫なんぞにぜいたくさせちゃいかん、とんでもねえと腹が立っていたもの。魚の白身、とりのささ身、ビーフ、レバーと何種類もある。奇蹟が起こるかも知れん。ふだんコロコロした兔のふんみたいなものだけ食わせていたから、白身の魚のあまりのうまさに、パクパク食べてガンがだまされるかも知れん。レバーなんぞペロペロ食べたなら、もしかしたら肝臓のガンも負けるかも知れん。高いつたつて安いものだ。しかし奇蹟は起こらないだろうとも思う。

小さな皿にスプーン一さじをとり分けてフネの鼻さきを持って行った。

匂いをかいでフネは一さじ分を食べた。私は勇んでもう一さじを入れた。フネは口を閉じたまま私の目を見た。「ねえ、食べな」と私は云った。私は自分の

声に気が付いた。全然猫なで声になっていない。私は一生猫なで声というものを出した事がなかったらしい。フツの声しか出ないのだ。フツの人は皆猫なで声が出るものなのだろうか。猫は猫なで声をかけてもらいたいのだろうか。

「ねえ、もう一口食べてみな」。フツの声で私はまた云っているのだ。フネは私の目を見ながら舌を出して白身を一回だけなめた。私の声に一生懸命こたえようとしている。お前こんないい子だったのか、知らなかった。

気が付くとフネは部屋の隅に行っていた。本当にあと一週間なのか。もしかしたら、今そのまんま死んでしまっても不思議はないのか。苦しいのか。痛いのか。ガンだガンだと大さわぎしないで、ただじつと静かにしている。

畜生とは何と偉いものだろう。

時々そつと目を開くと、遠く孤独な目をして、またそつと目を閉じる。

静かな諦念がその目にあつた。

人間は何とみつもまないものなのだろう。

じつと動かないフネを見てると、厳肅な気持になり、九キロのタヌキ猫を私は尊敬せずにいられた。

時々じつと動かないフネの腹のあたりを見た。かすかに波打っている。父が死ぬ前、うすべつたくなった父の胸のあたりのおとんをぬすみ見た時の事を思い出した。そんな時不意に父が目をあけて、私を見ると、私はへどもどしたものだ。

まだ生きている。

時々おき上って、砂箱に小便をしに行つた、時々水を飲んだ。そのうちたれ流しになるのだろうか。たれ流ししてもいいからね、たれ流ししてもいいんだよ。でもなるべくたれ流さんでくれる？

一カンのえさがなかなか空にならなかった。

フネはじつと静かにしているのに、私は騒いでいた。

(中 略)

フネは部屋の隅にいた。クエツと変な声が出た。ふり返ると少し足を動かしている。ああ、びっくりした、死んだかと思つたよ。二秒もたたないうちに、またクエツと声が出て、フネは死んだ。全然びっくりしなかった。

私は毎日フネを見て、見るたびに、人間がガンになる動転ぶりと比べた。ほとんど一日中見ているから、一日中人間の死に方を考えた。考えるたびに肅然とした。私はこの小さな畜生に劣る。この小さな生き物の、生き物の宿命である死をそのまま受け入れている目にひるんだ。その静寂さの前に恥じた。

私がフネだったら、わめいてうめいて、その苦痛をのろうに違ひなかった。

私はフネの様に死にたいと思つた。人間は月まで出かける事が出来ても、フネの様に死ねない。

(佐野洋子『フツに死ぬ』より)

※ 原発：ガンが最初にできた場所。

安楽死：苦痛を与えずに死に至らせること。

ステロイド：薬の一種。

諦念：物事の道理をさとして迷わないこと。

厳肅：おごそかで、心が引き締まる様子。

肅然：心を引き締め、かしこまる様子。

問一——部1「えーッ、ガン！猫なのに」とありますが、この時の筆者の気持ちを持ちを四十字以内で答えなさい。

問二——部2「私はそれをぐいっつつかんだ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 医者の人柄を利用し、フネの最期を自宅で迎えさせてくれるように無理に頼んだということ。

イ 沈黙に耐えることのできない医者の弱さにつけこみ、いつでも電話を受けとるように要求したということ。

ウ 筆者を思いやつて安楽死を決めきれずにいる医者に好感を持ち、治療を依頼したということ。

エ 全ての要望を受け入れてくれる医者に、フネを病院に連れていかないので済むようにお願いしたということ。

問三——部3「ステロイドはやつぱり一瞬のドーピングだったのだ」とありますが、この表現から「フネ」の体調がどのように変化したことが分かりますか。三十字以内で答えなさい。

問四——部4とありますが、筆者が「一番高いかんづめ」を買つたのはなぜですか。その理由を説明した次の文の□に入る適当な言葉を二十文字程度で答えなさい。

最期くらいはフネに良いえさを食べさせてやりたいと思う一方で、それによって、□から。

問五——部5とありますが、筆者が「じつと動かないフネ」を「尊敬せずにいられた」のはなぜですか。その理由を五十字以内で答えなさい。

四 次の一部的カタカナを漢字で書きなさい。

① 強敵を相手にフンセンする。

② 正月にはキョウリの福岡県に帰る。

③ キャプテンが部員をトウソツする。

④ 病状がカイホウに向かう。

⑤ ライバルとの試合にハイボクする。

⑥ 教育制度をカイカクする。

⑦ 友人としてチュウコクする。

⑧ 子どものジュンシンな心に感動する。

⑨ ケワしい山道を歩く。

⑩ イサギヨク自分の責任を認める。

一

問五			問四	問三	問二	問一
II		I				A
						B
						C

二

問六		問五		問四	問三	問二	問一
6	5	II	I				A
							B

三

問五		問四	問三		問二	問一			

四

⑥	①				
		⑦	②		
				⑧	③
				⑨	④
				⑩	⑤

受験番号